

佳作

灯をつないで

秋田県立秋田南高等学校中部

1年 山田 煌真

「ピーッ」

笛の音を合図に 238 本もの竿が夜空に向けて上げられる。ゆらゆらと提灯が揺れるさまは、まるで光る稲穂だ。

今年、秋田では3年ぶりに「秋田竿燈まつり」が開催された。久しぶりに聞く竿燈囃子に

「秋田の夏が来た」

と胸が躍った。

僕は小学4年生まで竿燈の差し手をしてきた。差し手とは竿を持ち上げて演技をする人のことだ。竿燈には平手、額、腰、肩とさまざまな技がある。僕はその中でも平手を使っていた。手のひらで竿燈を上げる一番基本的な技だ。始めた頃は竿を持つことすら難しく、その重さに苦戦した。

「力じゃなくバランスが大事なんだよ。」

と教えてもらったが、そううまくはいかない。とにかく平手を習得するだけで精いっぱいだった。その頃から僕には憧れの技があった。腰で竿燈を上げ扇子を広げてみせる技だ。一番簡単な技ですらやっとの僕には、とても遠くにある技。でも、いつかきっとできるようになりたいと思い続けていた。

ようやく竿燈の技にも慣れ、祭りを楽しめるようになって数年が過ぎた。幼稚園の頃から幼若と呼ばれる一番小さい竿燈を上げていた僕は、小学4年生で小若を上げることになった。幼若は重さ5キログラム。それに対して小若は15キログラム。一気に3倍の重さを上げることになり、僕は再び苦戦することになった。技を決めるどころか持つことさえままならない。持っているだけで風にあおられて竿が倒れてしまうのだ。それを見ていたベテランの差し手が

「風が吹いている方向の反対側に自分の体を向けた方が良いよ。」

と教えてくれた。実際その通りにやると倒れる回数は格段に減った。次の課題はバランスだった。いくら風に持って行かれなくてもバランスが悪いと竿を上げることができない。そこで大人の差し手たちからアドバイスをもらった。足の開き方、足を向ける方向、姿勢など。それらを生かしてやってみた。でも全てを形にするのはなかなか難しかった。そして本番が近づいてきたある日、バランスがとれるようになった。そして本番までの期間、ひたすらその上げ方の練習を積んだ。

迎えた本番の日。初めての小若での演技に緊張感でいっぱいだった。演技する地点に着いた。そして演技が始まった。年上の人たちや兄が竿を上げ、ついに自分の順番がやってきた。いきなりバランスを崩しかけたがなんとかこらえてそのまま倒さず自分の最初の出番を終えた。

ふと周りを見てみると大人たちが僕の演技する竿燈の竿より遥かに大きい竿で演技していた。しかも、それが何本も何本も上がっている。僕はその時、演技に圧倒された。大人の上げる大若は重さ 50 キログラム。差し手たちはその重さをもものともせず次々と技を繰り広げる。間近で見る迫力は素晴らしく、観客として見るものとは別格だった。憧れの技も近くで見ることができた。やっぱりカッコよかった。いつか僕も、と決意を新たにした。

その次の年、新型コロナが全世界で急拡大し、日本も影響を受けた。休校で学校に行けないという今まで経験したことのない日々を過ごすことになり、竿燈まつりは中止になった。そして新型コロナの猛威はおさまることがなく、その次の年も中止。大変なことが続く中、僕の頭からは竿燈に関することがすっぱり抜け落ちてしまった。

そんな夏が 2 年連続で続き、3 年ぶりに開催されることが決まった竿燈まつり。でも僕は参加しなかった。この 3 年、一度も竿燈は上げていない。人前で演技することに自信がなかったのが一番の理由だと思う。でも最終日に見に行くことにした。竿燈大通りに人がたくさんいる。屋台村でご飯を食べてから、会場に向かった。暗くなるにつれて人が増えてくる。市長の挨拶の後、続々と竿燈会の人たちが入場してきた。全ての竿燈会が演技する位置に着いた。そして演技が始まった。久しぶりに秋田の夜空に稲穂の光があふれた。僕は 3 年の夏の空白は竿燈がなかったからだ気づいた。物心ついた頃から毎年夏に竿燈と触れ合っていたから当然のことなのかもしれない。来年は竿燈の差し手に戻りたい、そう強く思った。

10 年後の僕は大人になっている。竿燈も大若を上げているはずだ。大若に挑戦するときにはまた苦戦するだろう。その時は先輩たちのアドバイスを聞いて頑張りたい。そして憧れのあの技、腰で竿燈を上げ扇子を広げる技に挑むと決めている。